

2014年度 事業計画及び事業報告

全般【公1】

1. 事業部門が核となり、全体のコンセプト、イメージ等を統一し、すべての事業を計画、実施する。
→ 話し合いは持たれたが、全体を統一するまでには至らなかった。
2. 様々なツールを活用し、最新情報を、常に外部に発信することに努める。
→ ホームページのブログへリンクするようにフェイスブックを開設し、多くの方へ情報を発信した。

健康教育【公1】

1. 社会福祉法人と協働して、介護予防や成人のウェルネスプログラムの開発について検討し、試行的な活動をスタートさせる。
→ 検討はしたが、開発・実施までにはいかなかった。
2. 宇都宮YMCAの健康教育事業は、ニーズや効率を検討し、微調整を行う。
→ 成人向けにズンバ体験レッスンを11月に開催したが、定例化には至らなかった。
3. 水泳を含めた長期休業中のプログラムを検討実施する。
→ 冬休みに1泊2日のスイミングキャンプを行った。

野外教育【公1】

1. 宇都宮YMCAとトライ東(あそぼの家含む)及び他のランチの事業を整理し、全体で年間の実施計画を作成する。
→ 計画する活動の方向性は調整したが、協働での実施までには至らなかった。
2. グループ活動を従来の固定したグループと緩いグループの2つの活動に整理し、合理的に実施する。また各ディレクターを明確にし、その元にリーダー会を組織し、グループ活動の本来の形を再現する。
→ 参加を登録者のみとした「野外クラブ」(9回開催、延べ155名)と、参加者を毎回公募する「Yキッズ」(10回開催、延べ229名)の2つに整理し、それぞれが特徴ある活動を計画・実施した。
3. キャンプ全体のコンセプトをまず見直し、キャンプ地、対象、広報の方法などの再検討を行い、全体の計画を立上で、実施拠点を決定し、この計画に基づいて実施する。
→ 幼児を対象とした活動や国際理解の要素を持った活動は多くの参加者を得て実施することができた。しかしながら宿泊数の長い活動は各シーズンとも参加者は少なかった。参加ニーズの調査と共にYMCA野外活動の理解促進を図っていくことが課題である。
4. ディキャンプは効率的に実施すると共に、リーダートレーニングの充実を図る。
→ 多くのユースボランティアリーダーが参加し、夏・冬・春のシーズン活動に向けてトレーニングを行うことができた。

語学・国際教育【公1】

1. 栃木県のより多くの方々が他国語にふれ、国際感覚が養われる機会をより多く作り出す。
→ フィリピンの招聘生との交流する機会(ウエルカムパーティ、フィリピン祭りなど)を行うことができた。
2. YMCAや地域で行われる国際交流活動の情報を地域の方々に提供し、単なる語学の習得にとどまらず、実際に使える語学の習得を目指す。
→ 地域の国際イベントを随時発信するとともに、「フェアトレードまつり」や「フェスタmy宇都宮」にも参加した。また「ICEPキャンプ」や「英語でショッピング」などの課外活動を多く開催し、英語を使う機会を提供した。
3. フィリピン台風被災支援に継続的に関わり、全国のYMCAと協働した働きを行う。
→ フィリピン台風災害支援募金から、ユースボランティアリーダー3名をフィリピン台風ワークキャンプに派遣した。
4. 国際交流を図るうえで必要となる語学力をすでに持ち合わせた帰国子女生を真の国際人に育成するレッスンを構築し、YMCA語学教育の特色を鮮明にする
→ 理事の中川哲夫氏を講師に開発教育を2回行い、帰国子女の一部の生徒が参加した。
5. 地域の国際協力への意識を高め、とちぎYMCA全体で、年額100万円の国際協力募金を集めることを目指す。
→ 目標額には至らなかったが、例年よりも約20万円アップの55万円を集めることができた。
6. 近隣諸国を身近に感じ、平和協力への一歩につながるよう環境作りを行っていく。
→ フィリピン祭りの際に「世界一大きな授業」を行ない、子どもから大人まで世界の事情を学ぶ機会を提供した。

チャイルドケア【公1】

1. 子ども子育て新制度における幼稚園の形態を決定する。
→ 幼稚園の新制度移行に助言・協力した。
2. 学童保育を充実させる。
→ 保護者や子どもが安心して利用できるようにプログラムを設定したが、多くの利用者を得ることが出来なかった。
3. 未就園児(0~2歳児)プログラムの充実を図る。
→ 宇都宮市にて市営保育園の民営化に伴う保育所整備法人募集が行われ、とちぎYMCAグループとして応募を検討し、制度上の理由から社会福祉法人で応募し、選定された。その過程や選定後の準備に公益財団法人もグループとして関わった。携わった職員は法人間の人事異動により、園長及び事務長として勤務することになった。
4. 土曜日開催のプログラムを見直し、特色のある保育サービスを行う。
→ チャイルドケアの要素も取り入れた野外グループ活動「Yキッズ」と「野外クラブ」をスタートさせた。
5. 保護者や地域の方々、若者が関わり、地域で共に子育てを行う。
→ 検討はしたが、開発・実施までにはいかなかった。
6. 子育て、子育ての講演会を計画・実施する。
→ 5月31日開催のYMCA大会にて、「YMCAと、これからの子育て支援」をテーマに、千葉明德短期大学の石井章仁准教授の講演会を行った。

チャレンジド【公1】

1. 現在行っているグループの実施体制の再検討を行う。
→ 平日開催の放課後クラブ「ぽっぷこーん」においては、健常児の放課後クラブ「フレンドシップ」と一部内容を合わせたりして、子ども達の交流を計った。
2. 小学生年齢までの、いわゆる「軽度発達障害」児童に対する新たなグループ活動を開発・実施する。
→ 検討はしたが、開発・実施までにはいかなかった。
3. チャリティーランを実施し、チャレンジドの活動の充実を図る。
→ 6月29日、栃木県総合運動公園陸上競技場にて、たすきリレー55チーム・275名のランナーを含む総勢850名が参加して行うことが出来た。

トライ東【収1】

1. 青少年活動センター利用者に対し、主体的な活動を行うために、呼びかけや機会をもうけ、様々な講座を行う。
→ 小学生から青少年を対象としたセミナーを延べ404回開催し、延べ6,646名の参加者を得た。
2. ロビーの一部を青少年が気軽に集える場所としてロビーを整備し、ロビーワークを展開していく。同時にそこに対応していくボランティアを募り、養成していく。
→ 青少年向けに駄菓子の販売コーナーを設けたり、カフェをセミオープンした。
3. あそぼの家を幼児中心の場として、プログラムを実施し、保護者が積極的に関わっていく仕組みを作る。
→ 親子で参加出来るプログラムを延べ51回開催し、延べ1,479名の参加者を得た。
4. 地域にあるトライ東として、青少年に対し、学校、トライ東、家庭の流れの中で、青少年に対して、より良い関係を築いていく。
→ 「青少年デイ」を設け、体育館の優先利用や空き教室の自習室利用など、施設を開放した。
5. 2014年度からの三カ年の計画を立て、青少年活動センターの展望を持ち、段階を追って活動を実施し、積み上げていく。
→ 一年目は青少年への認知を広めることを目的とし、「腕相撲」「マルシェ」など色々なイベントを行った。

ユース【公1】

1. 若者ボランティアを積極的に募集し、各活動で育成する。
→ 県内の幾つかの大学にてボランティアリーダーの募集を行った。
2. YMCA同盟主催の様々なワークキャンプ、国際会議等に、積極的にリーダー派遣を行う。
→ フィリピン台風ワークキャンプを始めとして、幾つかの活動に派遣した。

地域支援活動【公1】

1. 各地域(宇都宮・足利・那須)でボランティアを募り、地域を豊かにする活動を実施する。
→ 那須において11月8日にパイプオルガンコンサートを開催し65名の参加者を得た。足利においては12月13日に市民クリスマスを開催し120名余りの参加者を得た。また東日本大震災の復興を願う「揚がれ！希望の凧」を3月7日と8日に行い、宇都宮会場120名・足利会場60名・那須会場30名の参加者を得た。